



◆タイトルがかなり異色な本作は、現代詩人、最果タヒ氏の同名の詩集を基に映画化されたそうだ。その点について、石井裕也監督自身が、「詩集が原作の脚本は初めて。難しかったです、こういう映画化の企画があってもいい」と語っているとおり、本作は導入部からかなり異質。本作は冒頭から、多分その詩集に載っているいくつかの詩が、東京に一人で住み、看護師とガールズバーのアルバイトを掛け持ちでやっている美香（石橋静河）の硬質（無機質？無愛想？）な声で朗読されていく。その中で、美香ともう一人の主人公である東京の建設現場で日雇い労働者として働く若者慎二（池松壮亮）たちの自己紹介とその生態が紹介されていくわけだ。

たしかに今ドキ、特別の縁故も特別の資格も能力もない若者が、東京で生きていくのは大変だろう。そして、最果タヒの詩集は、たしかにそんな美香や慎二の悩ましい生き方をピタリうたっているようだが、それが一体どうしたっていうの・・・？

◆若者が生きていくのが非常に難しくなっている今の時代、東京という大都会の中で孤独を余儀なくされる今ドキの若者のピュアな恋愛劇という意味では、本作はたしかに異色で、観ておくべき映画かもしれない。しかし、つい先日、高校卒業後50周年の「68歳記念同窓会」に出席した私には、やっぱり本作への共感は無理だった。

石井裕也監督が本作で、「東京で暮らして居心地がいいと感じている人などいないのでは」と語っている通りの視点を貫いているのはお見事だし、今後も「自主製作的な映画は撮り続けたい」と語っている通りの活動を続けてもらいたいが、本作のような映画は当面私には無関係のようだ。

2017（平成29）年6月8日記